人間文化創成科学論叢　第16巻　2013年

ウィトゲンシュタインの「世界像」の命題について

石　田　恵　理*

World-pictures in Wittgenstein's *On Certainty*

ISHIDA Eri

Abstract

In Wittgenstein's work *On Certainty*, he regards propositions like "Here is one hand." and "The earth was already there before my birth." as indicating our world-pictures. Wittgenstein shows that these propositions are the examples of our basis of language-activity. Wittgenstein thinks that these propositions differ from other propositions from the point of verification. Wittgenstein thinks that such basis exists at the bottom of our belief and judgment like our common sense, and gives plausibility to our assertions, however we may doubt it sometimes. To understand the notion of world-pictures is important so as to make our basis of belief and judgment clear.

For this purpose, elucidation of the characteristics of world-pictures is needed. Firstly, Wittgenstein notices that world-pictures are exchangeable for the propositions supported by them, which means that world-pictures as our basis of belief and judgment are the function that various propositions could fulfill. Secondly, he clarifies world-pictures are not well-grounded and this characteristic is related to our practice. Therefore, a member of one community whose practice is based on world-pictures may have different world-pictures from the others. I maintain that world-pictures could exist as the basis in a different way from our common sense.

Keywords: Ludwig Wittgenstein, *On Certainty* (*Über Gewissheit*), world-pictures, basis, practice

1.「世界像」の命題

「世界像」とは、ウィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein,1889-1951)の遺稿である『確実性の問題』に登場する語である。ウィトゲンシュタインが、この語で示そうとしたのは、ムーアが「常識の擁護」「外界の存在証明」の二論文であげた「ここに手がある」「地球は私の誕生のはるか以前から存在する」等の命題で表わされる、われわれの信念や判断の基盤となっているような事柄である。

ウィトゲンシュタインは、われわれの信念や判断の基盤には、根拠を問われたり、疑われたり、探求されたりすることのない事柄が必要であると考えていた。しかし、これは、われわれが通常の基礎付け主義の知識の定義である、知っていることは根拠を求めて正当化できることである、というときに考えている根拠とは異なっていると思われる。なぜなら、ウィトゲンシュタインは、これらの命題について、信念の成立や判断の基盤となることも、懐疑や探求の対象物となることもあるという役割の交換を指摘していたからである。

ウィトゲンシュタインは、基盤として常に一定の事柄が存在しているのではない、基盤とは実践の中で割り当てられる役割であると指摘していたと理解できる。この指摘によって、われわれは基盤として扱われる事柄はな

キーワード：ウィトゲンシュタイン、『確実性の問題』、世界像、基盤、実践

＊平成19年度生　比較社会文化学専攻

ぜそのように扱われるのか、その理由に目を向け、一定の事柄がその役割を果たす必要が何故ないかを考えられるようになると言える。

本論文の目的は、常識とは異なる基盤である「世界像」に注目し、「世界像」のいくつかの特徴をあげることによって、なぜ、基盤とは、一定の事柄がなるものではなく、さまざまな命題によって果たされる役割であると捉えることができるのかを明らかにし、基盤として扱われる事柄がなぜそのように扱われ得るのかを明らかにすることである。

2．基盤の必要性

ウィトゲンシュタインが、『確実性の問題』で、「世界像」について言及している箇所として、次のような箇所をあげることができる。

> ムーアは、自分の誕生のはるか昔から地球が存在したことを知っている、と言う。このように表現されれば、それは物理的世界についての言明であると同時にムーア個人にかかわる言明であるように見える。しかし哲学的にはムーアがあれこれのことを知っているかどうかは問題でなく、それが知識の事柄であるということ、またいかにしてそれが知られうるかということこそ問題なのである。ムーアがわれわれに、ある天体とべつの天体の間の距離を自分は知っていると告げたとすれば、そのことからわれわれは、ムーアが何かそのための探求を行なったのだと推理するだろうし、どういう探求をしたのか聞こうとするだろう。だがムーアが選んだのは、皆がムーアと同様に知っており、しかもどうやって知るかを述べることができないような場合なのだ。例えば私はこのこと（地球の存在）の知識に関して、いささかもムーアに劣ることがないと信じている。それを知っている、というムーアの主張が成りたつのなら、私もまたそれを知っているのだ。ムーアが或る思考の筋道を経て当の命題に到達し、私は同じ道をたどることができたのにその労をとらなかった、というのとは事情がまったく違うからである。(ÜG 84) [1]

> ある種の命題に関しては、その表明に対して疑いを挿しはさむ余地がまったくない。われわれの探求の全体がそういう仕組になっている、と言えないだろうか。それらの命題は、探求が進められる道筋からはずれたところあるのだ。(ÜG 88)

ウィトゲンシュタインが世界像として問題にした、「ここに手がある」「地球は私の誕生のはるか以前から存在する」等の命題は、われわれが常識として当然としていることを表した命題と比較して、命題自体に特殊性があるわけではないと言える。しかし、上記の節から読み取れるように、それらは、例えば、天体間の距離のように、それを確かとするために何らかの探求が必要な命題ではなく、何故かわれわれが皆同じように確かであるとしている命題であると言うことができる。つまり、われわれの探求全体の仕組みによって、疑いを挿しはさむ余地がまったくないことが認められている命題であり、根拠によって確かであるとされる命題とははじめから異なる命題であると言える。ウィトゲンシュタインが問題にしようとしたのは、このような特殊な取扱いをわれわれが認めている命題であると言うことができる。

さらに、ウィトゲンシュタインは、

> どんな事実も確実と見なさない者にとっては、自分の用いる言葉の意味もまた確実ではありえない。(ÜG 114)

> すべてを疑おうとする者は、疑うところまで行き着くこともできないだろう。疑いのゲームはすでに確実性を前提している。(ÜG 115)

と述べ、このことから、疑いえないものの存在がなければ、われわれは疑うことができないと捉えていた。つま

り、ウィトゲンシュタインは、「ここに手がある」「大地は私の誕生のずっと以前から存在していた」等の、われわれにとって基盤となるような命題と、その基盤において懐疑されたり探求されたりする命題を区別していたと言える。

ウィトゲンシュタインが、われわれの信念の成立や判断の基盤となる事柄について、実例に即して言及している箇所としては次のような節をあげることができる。

> 計算を習う子供は、教師の計算を信用してよいということも併せて教えられるのであろうか。いずれにしろこうした説明は、どこかで打ち切られなければならぬはずだ。それとも、自分の五官を信用してよいということまで、子供は教えこまれるというのだろうか。—これこれの場合には感覚をあてにはできないということを、われわれがしばしば子供に言いきかせているのは事実であるが。
>
> 規則と例外　(ÜG 34)

> どちらが右手でどちらが左手であるかをいかにして判定するか。私の判断が他人のそれと一致することを、私がどうやって知るのか。この色が青であることを私はいかにして知るか。こういう場面で私が私自身を信用しないのなら、なぜ他人の判断を信じなければならないのか。ここに理由と称すべきものがあるだろうか。とにかく私は、どこかで信用することを始めなければならぬのではないか。つまりどこかで疑いを遮断して事を始めなければならない。これは許容しうる軽率さといったものではなく、判断作用そのもののありかたなのだ。(ÜG 150)

先に挙げた節では、われわれの信念の基盤が、続いてあげた節では、われわれの判断の基盤が問題になっていると考えられる。われわれが計算の体系を習得する際に、まずお手本とする先生の計算を信用して良いということから教えられる必要があるとは考えられない。また、われわれは五官を通してさまざまな感覚を得て、外界について自分達の信じていることの体系を形成していると考えられる。確かに錯覚等、見たままを信じることができない場合も存在する。だが、われわれの外界についての信念の体系の基盤に含まれる、五官を信用して良いということをわれわれは教わる必要はないと言える。さらに後者の節の、こちらが右手でこちらが左手である、あるいは、この色は青である、といった判断の基盤となる事柄について、われわれは皆と一致していることを確かめてからその判断を信じているとは言えない。これらの基本的な事柄に関する判断について、われわれが自分の判断を理由をあげることなしには信用できないとすれば、そもそもなぜ同様の仕方で判断を下す他人の判断との一致を問題とするのか理由が分からないからである。われわれは、これらの基本的な事柄についての判断を基にして、外界についてのより複雑な判断の体系を構築することを可能にするために、理由なしに、この種の判断を受け入れていると言うことができる。

以上のことから、ウィトゲンシュタインの捉えている基盤は、誰もが疑い得ないような根拠を求め、そこから知識の体系を確立しようとする、知識についての基礎付け主義における基盤とは異なったものであると言える。なぜなら、ウィトゲンシュタインの捉える基盤は、信念や判断の成立についてのそれぞれの実践の中での疑いを免れていることにあたる別種のものと言えるからである。

3.「世界像」の命題の役割の交換

シュルテによれば、『確実性の問題』では、われわれが基盤としていることについての対立する二つのイメージが採用されている。これは、一方では、ウィトゲンシュタインが、われわれの信念の基盤の存在について言及しながら、他方では、基盤は、支えていると思われているものから支えられていなければ、基盤として成り立たないようなものである、と述べたことを指している。もしそうであるなら、この基盤は、実際には、われわれが基盤ということで通常期待している、何かを支えるものであって支えられるものではない、というものとは異なっていることを指摘できる[2]。このことは、具体的には、『確実性の問題』の以下のような記述から見出されている。

> 私に両手があるということを、今の今疑うとしたらどうだろう。なぜそれは私にとって、まったく想像のほかのことなのだろう。両手の存在を疑うとしたら、私はそれ以外の何を信じるというのか。私にはこの疑いに場所を与えるような体系の持ち合せがないのである。(ÜG 247)

> 私はすでに、自分が抱懐するあらゆる信念の根底まで達した。だがこの基礎はまた家の全体によって支えられている、と言っても言い過ぎにはならないだろう。(ÜG 248)

ここで、ウィトゲンシュタインは、「私に両手がある」ということで、われわれの信念の体系の根底に到達したと述べ、われわれの信念の体系には基盤があるという考えを提示している。しかし、その後、この基盤は、支えているものによって支えられるものとされない限りは、基盤として成り立たないようなものであると述べている。

また、コーバーは、「世界像」の命題を、われわれの実践において「言及されない前提」となっているようなものと捉えており、この前提は、われわれが行っている言語ゲームの種類を交換することによって、前提としていることから、探求の対象へとその役割を変えることがあるとしている。

コーバーが挙げているのは、われわれが「これは手である」ということを前提として、手の痛みに関する言語ゲームを行っている場合[3]である。患者が医者に、自分の手の痛みを説明している時、「これは手である」ということは、われわれの実践において、言及されない前提となっている。しかし、その患者の痛みの描写が、どの症例にも関連づけられないとき、医者は患者に「鋭い」や「筋肉に」痛みを感じているということで、患者が何を意味しているのか知るために、更なる描写や明確化を求めることがあり得る。そして、患者が「手」あるいは「痛み」ということで何を意味しているのか、問う段階まで到達した時には「ゲームの交換」が起こっているとされる。問題が痛みの原因を発見するということから、患者がその言語でコミュニケーションをとることができるか、ということに変化していると考えられるからである。つまり、コーバーは、この「言及されない前提」は、言及することを禁止されているのではなく、この前提が言及される状況は想像可能だと考えている。

このシュルテとコーバーの指摘は、われわれが基盤ということで通常考えるものとは一致しないと思われる。なぜなら、われわれが基盤ということで捉えているものは、「固い岩石からなり…まったく変化がない、あるいは目に見えない程度しか変らない」河岸の一部(ÜG 99)のようなものであると思われるからである。つまり、われわれが基盤ということで考えているのは、われわれの信念や判断の根底に、変わることなく存在し続けているものである。だが、以下の節に見られるように、『確実性の問題』では、われわれが持っている基盤は、懐疑や探求の対象物となることを禁止されているのではなく、むしろ、支えているはずのものに支えられているような命題であると指摘されているのである。

> こう考えてもいいだろう。経験命題のかたちを具えたいくつかの命題が凝固して、固まらずに流れる経験命題のための導管となるのである。この関係はときに応じて変化するのであって、流動的な命題が凝結したり、固まっていた命題が逆に流れ出したりする。(ÜG 96)

ここでは、われわれが基盤としている命題は、時としてその役割を変え、これまで支えていたものに支えられることもあると指摘されていることを読み取れる。つまり、われわれの実践の基盤となっているのは、常に一定の命題ではなく、様々な命題が基盤としての役割を果たすと考えられる。

4.「世界像」の命題の独自の確かさ

以下では、この「世界像」の命題の独自の確かさについて、フィリップスの考察からさらに検討を加えたい。フィリップスは、「世界像」の命題を、われわれの共同体との関連で捉え、「世界像」は、われわれが選択によって身につけることのできないものであり、自由に疑うことができないものである、と捉えている[4]。このことは、『確実性の問題』の以下の節からも読み取ることができる。

私の世界像は、私がその正しさを納得したから私のものになったわけではない。私が現にその正しさを確信しているという理由で、それが私の世界像であるわけでもない。これは伝統として受けついだ背景であり、私が真と偽を区別するのもこれに拠ってのことなのだ。(ÜG 94)

さらに、フィリップスは、われわれの「世界像」は、われわれの実践のあり方と切り離して考えることはできない[5]と捉えている。このことは、以下の節からも理解することができる。

誰かがわれわれに、「それは真か」と問うとする。われわれが彼に、「その通り」と答える。さらに彼が根拠をたずねたら、こう言ってもよい。「私は君にどんな根拠を示すこともできない。しかし君の勉強がもっと先に進んだら、君も私と同じように考えることだろう。」もしそうならなかったら彼は、例えば歴史を、ついに学ぶことができなかった、というだけのことである。(ÜG 206)

ひとが教えてくれることをすぐさま疑うなどということが、どうして子供にできるだろうか。それは或る種の言語ゲームを学ぶ能力がその子供にはないということを意味するだけである。(ÜG 283)

上記のように、われわれの共同体における生活との関連で捉えることで、「世界像」は、共同体の中で、成員が同じ行動をとることが可能になるための条件、という特徴を見出すことが可能になる。しかし、同じ行動をとるための条件ということで意味されているのは、それぞれの成員が全く同じ「世界像」を持つ、ということではなく、同じ行動を可能にするのであれば、条件自体は異なっている可能性もあり、最低限の条件付けである、と捉えることができる。

このことは、例えば、われわれが「左右」等の方向に関して持つ定義からも知ることができる。われわれが、「右」について、たとえ、南を向いた時に西にあたる方、という定義を持っていても、北を向いているとき東に当たる側という定義を持っていても、今持っている本の偶数ページがある側という定義を持っていても、結局、「右」がどちらかが一致しさえすれば、われわれは相手を自分と同じ実践を有している人とみなすことができることにそのことは表れている。

「世界像」は、われわれにとって通常は言語化されたりするようなものではなく、むしろ、人に教え込もうとする等特別な場合に、意識化されたり、言語化されたりすることがあると捉えられる。ウィトゲンシュタインは以下の節で、たとえ一度も考えたことがなくてもわれわれが「世界像」を持つこと、さらに、自分がそれを口に出して誰かに教え込もうとする時に奇妙な感じを持つことを指摘している。

子供の頃、われわれはさまざまな事実を学び、それを信じる。例えば、誰でも脳をもっているということ、豪州大陸が存在し、その形はしかじかであるということ、私には曾祖父母があるということ、私の両親と称している人たちが実際に私の両親であるといったことなどである。こういう信念がまったく言葉にあらわされず、そうした事どもについて一度も考えたことがなくても差支えはない。(ÜG　159)

子供が私に、地球は私が生れる前からあったのかを問うたとすれば、私は、地球は私が生れてから存在し始めたのではなく、すでに遥か昔から存在していたのだ、と答えるだろう。そう答えながら、何かおかしなことを言っているという感じをもつだろう。それは例えば、しかじかの山は自分が見た高層ビルよりも高いか、と子供がたずねる場合と似ている。さきの問に私が答えられるのは、世界像というものを教えこもうとしている相手に対してだけである。

私がその問に断乎として答えるとき、私にその確信を与えているのは一体何なのか。(ÜG 233)

「世界像」は、それに意識を向けることなく、われわれがある実践を習得したときにわれわれにとっての確かである基盤として保持されるものであるため、どういう世界像を持っているのか言い表わそうとする段階で、実践を共有していると考えられる人々が言い表わす命題が異なっていることは起こり得ると考えられる。そして、

自分と同じ実践に参加していると考えていた人が、自分のものとは異なった世界像を持っていることが明らかになるとき、自分が「世界像」とみなしている命題を相手が「世界像」としては認めないということが起こり得る。これは、自分が「世界像」として取り扱い、疑いがかかけられることはない、とみなしていることを、相手が懐疑や探求の対象とすることがあり得るということだと言える。しかし、そこで起きていることも、ここでの解釈に従うなら、同じ生活形式の体系の中で、命題に割り当てる役割が異なっているにすぎないと理解することができる。もし異なった「世界像」を持っていると思われたとしても、両者が同じ実践を共有していると考えられるなら、何らかの点でお互いに整合するような世界像を持っていると考えることは可能なのである。

例えば、われわれは、通常、「誰も見ていない時でも、物体は存在し続ける」という命題で表されることを「世界像」の一部として持っている。このことは、われわれが日常行っている実践において表面化し、言語化されたり、検証されたりすることのないものである。しかし、これについては、われわれが日常、自分が見ていない時にこの物体が存在し続けているか確かめようとはしない、ということからわれわれが持っている「世界像」として示すことができるだけである。つまり、例えば、「誰も見ていない時には、物体は消失しているのかもしれない、そして、誰かの視界に入る瞬間にまた存在し始めるようになっているのかもしれない」と考え、さらに、「物体が再び存在し始める瞬間を目にした人はいないし、これからもそれは起こり得ない」ということを「世界像」として持つ人と、実践を共有することは不可能ではないと考えられるのである。命題Pを「世界像」として持っている人と、Pの否定とその消去を「世界像」として持っている人との「世界像」の違いは実践において表面化しないと言えるのである。

このことは、マクダウェルが述べた、非認知主義者への見解からも窺うことができる。マクダウェルは、われわれの同じ概念を異なった対象に適用する典型的な例として、数列を続けて行く場合[6]について考えている。われわれは、この場合に関して、正しい動きがそれに沿って続くところのレールを示すような規則によって、同じことを続けていくことが決定されていると考える傾向がある。しかし、われわれが、そのレールを認識できるような、実践の外側にある観点を占めることができる、というのはわれわれの錯覚である、と指摘されている。また、われわれがその実践の正しい動きに対して行う反応や返答のような「生活形式」以上の基盤がなければ、同じことを続けていくことは可能にならない、というのもわれわれの誤解である、と述べられている。マクダウェルが目指したのは、われわれが２ずつ足すという実践を続けていくことができる、と考えているときの確信の根拠と性質の本来の姿をわれわれに理解させることである。われわれは、自分達がその実践に埋没している限り、自分達の実践の世界への関係について思い悩まず、外的な観点から認識できる堅固な基礎の必要を感じないと考えられるのである。独立の観点の存在によって保護されなくても、われわれは、生活形式に基づいて、２ずつ足すという正しい実践を行うことが可能であり、そこに事実との一致を見る必要はないとされる。われわれは、同じ概念を異なった対象に適用する実践を、変えられない機械の動きのように捉えてはいない、同じことを続けていくためには、実践とは独立の観点から認識可能なルールに一致して行動することが必要なのではなく、われわれの理性に圧力を加えるものがあれば、十分であるとマクダウェルは捉えているのである。

以上のことから、「世界像」の命題は、われわれが共同体の中で、同じ行動をとることが可能になるための条件であるが、同じ行動をとるための最低限の条件付けであるために、実践を共有していると考えられる人が全く同じ「世界像」を持つ必要はないということを指摘することが可能である。

５．交換が不可能である命題と不合理である命題

これまで、「世界像」の命題の独自の確かさについて、それはわれわれが基盤ということで通常考えるようなものではなく、特定の命題に割り当てられた役割ではないこと、また行動が可能になるための最低限の条件であり、同じ実践を保証する世界像が一定のものとは限らないことを指摘してきた。

さらに、ここで問題になるのは、「世界像」の命題の中には、「２＋３＝５」のような、われわれが典型的に確かであるとみなし、その役割が変化することは不可能に思われる数学の命題と、「地球は私の誕生のずっと以前から存在していた」のような、われわれの実践から遡って見出すことができ、疑うことが単に不合理だと考えられる命題が存在するということである。

『確実性の問題』では、300節前後の数節において、計算の命題と歴史の命題についての言及がなされている。

> こう言ってみよう。論理学の命題ばかりでなく経験命題の形式を備えた命題も、思想（言語）の操作の基盤をかたちづくるものである。このことは、「私は……を知っている」という仕方で確認されるのではない。「私は……を知っている」は私の知識を言いあらわし、それは論理学的な関心の対象にはならないのである。(ÜG 401)

> こう言いたいのである。算数の命題（例えば九々）が「絶対に確実」であることを不思議に思うひとはいないのに、「これが私の手である」という命題が同様に確実であると言われて、どうしてそんなに驚かなければならないのか。(ÜG 448)

このような箇所からは、ウィトゲンシュタインが、役割の変化が不可能であると考えられる命題と、不合理である命題についての確かさに明確な境界線を引いていたことを読み取ることはできない。

ウィトゲンシュタインは、計算のような、役割の変化が不可能な命題と、単に不合理である命題に明確な境界線が引けないことは、われわれの規則と経験命題の混同に起因する、と捉えており、むしろ、命題の概念が明確でないことが問題である、と捉えていたことを以下の箇所から理解できる。

> 「そんな疑問が生じる余地はない。」それに答えようとすれば、一つの方法を示すことになるであろう。だが方法に関する命題と、一定の方法にしたがって立てられる命題のあいだに、明確な境界は存在しない。(ÜG 318)

> それでは論理学の命題と経験命題の間に鮮明な境界はひけない、と言うべきなのか。正確に言えば、それは規則と経験命題の境界の曖昧さなのである。(ÜG 319)

> ここでひとは、「命題」という概念そのものが明確でない、という事情を考えるべきであろう。(ÜG 320)

つまり、世界像の命題は実践ができるようになったときに初めて、持っていると言うことができるようなものであり、最初から真偽やお互いが同じ真理値のものを持つことになるかが理解可能な命題の形をしているわけではないと言うことができる。２＋３＝５という世界像の命題を共有しない人は、われわれと同じ実践は可能にはならない、というより、同じ実践を共有できない人は、われわれとは、どのように解釈しても整合的にならないような世界像を持っていると言うことができるだけだと考えられる。また、相手がわれわれと同じ、２＋３＝５で表わすことができるような世界像を共有していないように思われる場合、われわれが第一にすることは他のことに疑いを向けることだと言える。

なぜなら、疑うことが不可能と思われる数学の命題は、

> 数学的命題には、いわば公式に、反駁不可能のスタンプが押されている。すなわち、「異議はほかの命題に向けよ。これは君の議論の支えになる蝶番であり、動かすべからざるものである」と。(ÜG 655)

と述べられているように、われわれとって「公式」に疑うことを免れている場合であると考えられるからである。われわれは、問題となっている命題について相手が共有しているのかではなく、相手がそもそも話題にしていることなど他のことに疑いの目を向け、「ゲームの交換」を行うだけで、最初から実践の外に出て行くことが必要となるとは考えられないのである。以下の節にあるように、

> 子供は学習によって多くの事を信じるようになる。つまり、そういう信念にしたがって行動することを学ぶわけである。こうして次第に信念の体系が形づくられて行くのだが、この体系に属するもののうち、一部は

> 動かし難く堅固であるが、一部はある程度動かせるものである。動かぬものは、それ自体が明瞭であり分明であるが故に不動なのではなく、そのまわりにあるものによって固定されているのである。(ÜG 144)

数学的な命題は、動かし難く堅固なものではあるが、動かせるものの延長線上にあるとウィトゲンシュタインは捉えていたのではないか、と理解することが可能である。

6．結論

以上のことから、「世界像」の命題が持つ独自の確かさについて、一定の命題が果たす役割ではないこと、また、人々が同じ実践が可能であるための最低限の条件にすぎないことを指摘し、われわれが通常基盤ということで考えるものとは異なる面を持つことを指摘した。

> 証拠を基礎付け、正当化する営みはどこかで終る。—しかし、ある命題が端的に真として直観されることがその終点なのではない。すなわち言語ゲームの根底になっているのはある種の視覚ではなく、われわれの営む行為こそそれなのである。(ÜG 204)

と述べられているように、証拠を基礎付け、正当化する営みの根底にあるのは、われわれの行為である、と考えられる。つまり、「世界像」の命題については、実践との関連で捉える解釈が妥当であり、われわれがある実践をすることが可能になった時に、初めて、どのような「世界像」を持っているのかが把握可能になると捉えられる。われわれが信念や判断の成立に関する実践を行っている際に基盤としていることは、一定のものではなく、実践から遡って基盤としての特徴が明らかになるようなものであると言える。

このような形で「世界像」に言及することの意義は、われわれが基盤としていることを命題の形で取り出し、注目することが可能になることであると考えられる。これは、同じ共同体に属することでわれわれが自然と共有するようになると考えられる常識の枠組みとは別に、一つの共同体に属し実践を共有している人々の枠組みが捉えられることを示唆する考えだと言うことができる。なぜなら、「世界像」と、常識の枠組みとの顕著な違いとして、まず、実践を共有していると考えられる人が全く同一の「世界像」を持つ必要はないということを指摘できるからである。また、同じ実践を共有できないことから振り返って、自分と相手がどのように解釈しても整合的にならない「世界像」を持っていることが明らかになるのであり、はじめからお互いの「世界像」の違いが言葉で表現できる形で理解できるわけではないということを指摘できる。前者は、われわれの実践の基盤とは、常に一定の命題がなるものではなく、さまざまな命題によって果たされる役割であるということに基づいており、後者は、「世界像」は、共同体の中で成員が同じ行動をとるための最低限の条件付けであるということに基づいている。これらの指摘は、ウィトゲンシュタインによってなされた「世界像」についての考察に基づいて可能になるようなことであると結論付けることができる。

註

1　ウィトゲンシュタインの著作『確実性の問題』を示す際には、略記号ÜGを用いた。数字は節番号である。翻訳は黒田亘訳を参照し、適宜修正を行い引用した。原著でのイタリックによる強調は、傍点で表記した。

2　J.Schulte, “Within a System”, in *Readings of Wittgenstein’s On Certainty*, (2007), p.59.

3　M.Kober, “ ‘In the Beginning was the Deed’:Wittgenstein on Knowledge and Religion”, in *Readings of Wittgenstein’s On Certainty*, (2007), p.228.

4　D.Z.Phillips, “The Case of the Missing Propositions”, in *Readings of Wittgenstein’s On Certainty*,(2007), p.25.

5　*Ibid.*, pp.20-26.

6　McDowell,John., “Non-Cognitivism and Rule-following”, in *The New Wittgenstein*, (2000), pp.41-49.

参考文献

Kober, Michael., “ ‘In the Beginning was the Deed’:Wittgenstein on Knowledge and Religion” , in Moyal-Sharrock, D. and Brenner, W.H. (eds) *Readings of Wittgenstein's On Certainty*, New York, Palgrave Mcmillan, 2007, pp.225-50.

McDowell,John., “Non-Cognitivism and Rule-following”, in Crary, A. and Read, R. (eds) *The New Wittgenstein*, London and New York, Routledge, 2000, pp.38-52.

Phillips, D.Z., “The Case of the Missing Propositions”, in Moyal-Sharrock, D. and Brenner, W.H. (eds) *Readings of Wittgenstein's On Certainty*, New York, Palgrave Mcmillan, 2007, pp.16-29.

Schulte, Joachim., “Within a System”, in Moyal-Sharrock, D. and Brenner, W.H. (eds) *Readings of Wittgenstein's On Certainty*, New York, Palgrave Mcmillan, 2007, pp.59-75.

Wittgenstein, Ludwig., *Über Gewissheit*, Oxford, Blackwell, 1969. (邦訳：『確実性の問題』黒田亘訳、『ウィトゲンシュタイン全集』第９巻、大修館書店、1975年　所収)。